

『源氏物語』における〈子を亡くす父〉の系譜

The Genealogy of Father Losing a Child in "The Tale of Genji"

外山敦子

TOYAMA Atsuko

キーワード：父と子、逆縁、物の怪、政治性

一、問題の所在

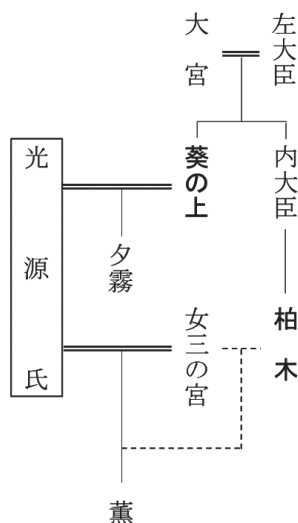
内大臣¹の嫡男で将来を囑望される柏木は、光源氏の継妻女三の宮が忘れられず、密かに通じ彼女を懐妊させてしまう。この密事はほどなく光源氏の知るところとなり、六条院で行われた朱雀院五十賀の試薬の折、柏木は光源氏のまなざしと皮肉交じりの言葉とに致命的な打撃を受け重病に臥す。年が明け、男子を出産した女三の宮はにわかに出家する。これを知った柏木は絶望し、人々に惜しまれつつ若くしてその生涯を終えた。

『源氏物語』「柏木」巻では、不義の子を我が子として抱かねばならない現実には過去の罪の応報を思う光源氏の憂悶と共に、家門を継ぐべき嫡男を原因不明のまま突然失った父内大臣の狼狽が繰り返し語られる。密通の事実を知らない父内大臣の尽きることのない悲嘆は、逆に

すべての事情を知る光源氏の苦悩とこの事件の悲劇性とを対比的に強調する役割を果たしていくことになる。

『源氏物語』には、〈子を亡くす父〉となる登場人物が内大臣以外にもう一人いる。それが他でもない内大臣の父左大臣である。彼も、かつて自家繁栄の礎として期待を寄せていた娘葵の上を二六歳という若さで亡くした。左大臣・内大臣父子は、二代にわたって逆縁の宿命を負っていたのである。葵の上と柏木は、共に生まれたばかりの我が子（それは同時に〈光源氏の子〉でもある）を残して急逝しており、二人の死をめぐる状況には共通点が見られる。柏木の死は、葵の上が早世したときの状況を重ね合わせたとき、その悲劇的であり方がより一層浮かび上がるしかけになっているのではないだろうか。

〔図1〕 人物関係略系図



本稿では、葵の上と柏木の死をめぐる類似的状況（あるいは差異）を挙げ、左大臣家が二代にわたって自家の繁栄を支える若者を失い、左大臣・内大臣父子がともに（子を亡くす父）の宿命を負うことが、二人の死の真相を知らない左大臣家にとって、なかでも二度にわたってこの不幸に直面した内大臣にとって、いかなる意味を持つのかを考察する。

二、過去との照応によって増幅する欠落感

柏木の死後、六条院では薫の五十日祝が行われた。本来ならば実父の喪中であるにもかかわらずこうして祝儀の中心にいる薫の運命に、光源氏は複雑な思いをかみしめる。どことなく故人の面影を宿す薫を腕に抱きながら、光源氏は柏木を亡くして憔悴する内大臣夫妻の心中に思いを馳せる。

親たちの、子だにあれかしと泣いたまふらむにも見えせず、人知れずはかなき形見ばかりをとどめおきて、さばかり思ひあがりおやすけたりし身を、心もて失ひつるよ、とあはれに惜しければ、めざましと思ふ心もひき返し、うち泣かれたまひぬ。

（柏木・三三四頁）²⁾

今ごろ柏木の親たちは「柏木に子どもさえいてくれたら」と泣いているだろう。その両親にこの子を見せてやることすら叶わずにと、光源氏は自滅していった柏木を痛ましく思う。ここで光源氏は、いま眼前にない内大臣らの胸中を半ば確信的に想像しているわけのだが、それができるのは、二六年前に葵の上が亡くなったときの状況を重ね合わせているためだろうと考えられる。

左大臣と大宮との間に生まれた葵の上は、右大臣家から東宮妃にと望まれながらも、父の深謀遠慮により光源氏の副臥を務めた。夫婦関係は長く疎遠であったが、結婚九年目にしてようやく葵の上は懐妊する。葵の上は難産の末に男子（夕霧）を出産するが、周囲が安堵したのもつかの間、物の怪に襲われて急逝した。

だが、葵の上は夕霧という形見を遺していった。このち夕霧は左大臣家で養育され、特に祖母大宮は、大勢の孫たちの中で特に彼を溺愛した。左大臣夫妻にとって夕霧は、葵の上を失った欠落感を埋めることのできる唯一の存在だったのだ。

葵の上が急逝したときの状況を重ね合わせたとき、柏木を亡くした内大臣が（葵の上が夕霧を遺したように）柏木の形見に思いを馳せているだろうと想像するのは、二六年前の過去を内大臣と共有する光源氏にとって難しいことではあるまい。

実際に、これが光源氏の単なる憶測でなかったことは、後に内大臣の次の言葉によって明らかになる。

父大臣のさばかり世にいみじく思ひほれたまで、子と名のり出でくる人だになきこと、形見に見るばかりのなごりをだにとどめよかしと泣き焦がれたまふに聞かせたてまつらざらむ罪得がましき、など思ふも（後略）。

（横笛・三六五頁）

右引用文は、夕霧が柏木の面影を宿す薫を見ながら、内大臣が「柏木の子だと名のり出る人すらいない」と悲嘆に暮れていたことを思い出す場面である。内大臣の心中は、光源氏の想像どおりであったことがここで明らかになるのだ。

葵の上は夕霧を遺したのに、柏木には形見の子がないという現実。なまじ照応する過去があるからこそ、内大臣はより深い欠落感に苦しまねばならなかった。「葵」巻との照応により、罪の子薫の存在とこの事件の悲劇性は、より鮮明に浮かび上がるしかけにもなっているのである。

三、「葵」「柏木」両巻の照応関係

―繰り返された悲劇として―

このように、左大臣家にとつての〈柏木の死〉の意味を、二六年前の〈葵の上の死〉との照応関係から改めて捉え直していったとき、どのような内実が見えてくるだろうか。親子二代にわたり〈子を亡くす父〉となった左大臣と内大臣だが、少なくとも内大臣には、逆縁に見舞われた父左大臣の狼狽や、家中の混乱の一部始終を最も近くで見てきた

『源氏物語』における〈子を亡くす父〉の系譜（外山敦子）

〈過去〉がある。その彼が、二六年後、図らずも父左大臣と同じ窮地に直面した。そのとき、彼は〈過去〉を教訓として何を思いどう行動したのか。以下、「柏木」巻を「葵」巻との照応関係から読み解き、これまで見逃されてきた父内大臣の行動の真意に迫ることとする。

病身の柏木を自邸に呼び戻し、懸命の加持祈禱をおこなう内大臣だったが、柏木の病は一向に好転しなかった。左引用文は、柏木が衰弱の一途をたどるなか、内大臣がさらなる手段を講じようとする場面である。

大臣は、かしこき行者、葛城山より請じ出でたる、待ちうけたまひて、加持まゐらせむとしたまふ。御修法、読経などいとおどろおどろしう騒ぎたり。人の申すままに、さまざま聖だつ験者などの、をさを世にも聞こえず深き山に籠りたるなどをも、兄弟の君たちを遣はしつづ、尋ね、召すに、けにくく心づきなき山伏どもなどいとも多く参る。わづらひたまふさまの、そこはかたなくものを心細く思ひて、音をのみ時々泣きたまふ。陰陽師なども、多くは、女の霊とのみ占ひ申しければ、さることもやと思せど、さらに物の怪のあらはれ出で来るもなきに思ほしわづらひて、かかる隈々をも尋ねたまふなりけり。（柏木・二九二―二九三頁）

いよいよ切羽詰まった内大臣は、息子たちに命じて葛城山から無名の験者をさえ呼び寄せる。祈禱の効果が現れないことへの焦りが、彼をなりふり構わぬ行動へと駆り立てていく。このように内大臣が物の怪の調伏にこだわらねばならなかった理由を、以下「葵」巻との照応から確認していきたい。

物の怪、生霊などいふもの多く出で来てさまざまの名のりする中

に、人にさらに移らず、ただみづからの御身につと添ひたるさまにて、ことにおどろおどろしうわづらはしきこゆることもなければ、また片時離るるをりもなきもの一つあり。いみじき験者どもにも従はず、執念きけしきおぼろけのものにあらずと見えたり。(中略)ただ、つくづくと音をのみ泣きたまひて、をりをりは胸をせき上げついでいみじうたへがたげにまどふわざをしたまへば、いかにおはすべきにかとゆゆしう悲しく思しあわてたり。

(葵・三二—三三頁)

懐妊中の葵の上は、新齋院御禊の物見における六条御息所一行との争いのあと、物の怪に悩まされるようになる。太傍線部の「音をのみ泣く」という行為は、葵の上に取り憑いた物の怪が葵の上の身体を借りて泣いているさまの表れであるとされ、なかでも決して葵の上の身から離れようとしないう物の怪は、優れた験者をもってしても調伏できず、執拗に葵の上を苦しめた。

しかし、もはや臨終かと思われた葵の上が奇跡的に出産を終えると、邸内の緊張感は急速に緩んでいく。

言ふ限りなき願ども立てさせたまふけにや、たひらかに事なりはてぬれば、山の座主、何くれやむごとなき僧ども、したり顔に汗おし拭ひつつ急ぎまかぬ。多くの人の心を尽くしつる日ごろのなごりすこしうちやすみて、今はさりとともと思す。(葵・四一頁)

大臣もうれしういみじと思ひきこえたまへるに、ただこの御心地おこたりはてたまはぬを心もとなく思せど、さばかりいみじかりしなごりにこそはと思して、いかでかはさのみは心をもまどはしたまはん。(葵・四三頁)

後産が無事に済むと、張り詰めていた邸内には安堵が広がり、危機が去ったことを誰もが疑わなかった。なかなか全快しない葵の上の様子にも、左大臣は「長患いの名残であるう」と見て、さほど心を砕くこともなかった。その直後、物の怪は再び葵の上を襲い、落命に至らした。葵の上の死は、父左大臣の一瞬の気のゆるみが招いた不幸であったともいえるのだ。

葵の上の死から二六年後、今度は柏木が原因不明の病に倒れた。しかも、前掲「柏木」巻引用文の太傍線部にあるように、病床に伏す柏木は二六年前の葵の上と同じように、「音をのみ時々泣く」姿態を見ている。この柏木の様子から「女の霊」の存在を疑った陰陽師の占いに基づいて、内大臣は徹底調伏を命じた。ただ一つの物の怪すら許すまいとする厳しい態度は、二六年前、父左大臣が一瞬の油断で葵の上を失った過去が脳裏にあるゆえではなかったか。つまり、内大臣の行動は、父の過ちを繰り返すまい、自分は父のようににはなるまいとする信念に基づくものであったのだ。

だが、そうした過去との類同的状况ゆえに、父内大臣はかえって柏木の病の真相から遠ざかっていくことになる。実際、柏木の病は物の怪のせいではなく、懊乱の末に心身を害していったものであり、「音泣く」姿態も物の怪のそれではなく、「などかく、ほどもなくしなす身ならん、とかきくらし思し乱れて、枕も浮きぬばかり人やりならず流し添へつつ」(柏木・二九一頁)とあるように、自責と後悔に苛まれて、柏木自身が泣きむせんでいたというのが真相である。つまり内大臣は、いもしない物の怪を調伏するために、息子たちまで使って山奥から無名の修験者たちを呼び寄せていたことになる。それもこれも、

自分は決して父左大臣のようにはなるまいとする一念からであったのだ。

しかしながら、その父の悲壮な覚悟こそが、皮肉にも柏木の病勢をつらせていくことになる。

この聖も、丈高やかに、まぶしつべたましく、荒らかにおどろおどろしく陀羅尼読むを、「いであな憎や。罪の深き身にやあらむ、陀羅尼の声高きはいとけ恐ろしくて、いよいよ死ぬべくこそおほゆれ」とて、やをらすべり出でて、この侍従と語りひたまふ。

(柏木・二九三頁)

柏木のために依頼した「おどろおどろしく」唱えられる霊験あらたかな陀羅尼に対して、柏木はこれによつて殺されてしまうかのような恐怖を覚えている。現世利益の奇跡を起こすはずの陀羅尼が人を殺すという話は、『天鏡』時平伝における藤原保忠(時平の長男)の逸話にも見える。病づいた保忠は枕元で薬師経の読経がおこなわれたとき、「宮毘羅大将」という箇所を「大将である自分をくびる」と聞き取つて、そのまま臆病心から絶え入ったという⁽¹⁾。この保忠と柏木との間に共通点が多いことはすでに指摘されている⁽⁵⁾。保忠と同じように、柏木も荒らかな陀羅尼の声で己の罪深さを思い知らされ、死期を早めていくことになったのだ。

そもそも、柏木は自分の「罪」の重さについて自覚的だったかといえは決してそうではなかった。そのことは女三の宮との密通後、左引用文などに一貫してあらわれている。

帝の御妻をもとり過ちて、事の聞こえあらむにかばかりおほえむことゆゑは、身のいたづらにならむ苦しくおほゆまじ。しかいぢ

『源氏物語』における〈子を亡くす父〉の系譜 (外山敦子)

じるき罪には当たらずとも、この院に目を側められたまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしくおほゆ。 (若菜下・二三〇頁)

(若菜下・二五八頁)

〔前略〕深き過ちもなきに、見あはせたてまつりし夕のほどより、やがてかき乱り、まどひそめにし魂の、身にも還らずなりにしを、かの院の内にあくがれ歩かば、結びとどめたまへよ」など、(後略)。

(柏木・二九五頁)

柏木は、女三の宮との過ちによつて身の破滅は避けられないだろうと覚悟はするものの、「帝の御妻」と通じて死なねばならぬほどの「罪」にはあたらなさと認識していた。だが、父によつて依頼された枕元の「おどろおどろし」い陀羅尼は、「罪の深き身」の自覚を迫るかのように、弱った柏木を執拗に追いつめていったのだ。

内大臣は、あらゆる手段を講じて衰弱する柏木を救おうとした。それは、二六年前に父左大臣が僅かな油断から葵の上を失った、その過ちを繰り返すまいという覚悟ゆえだった。だが、父のようになるまいとするその一念が、皮肉にも柏木を死に急がせる結果をもたらす。図らずも内大臣は、父左大臣と同じ宿命を自ら招き寄せてしまったのである。

四、内大臣のコンプレックス

—偉大なる父を超えられなかった子—

内大臣の父左大臣は、桐壺帝の妹・大宮を妻に得、またその腹に生まれた葵の上を桐壺帝の意向にしたがって光源氏の副臥に差し出し、光源氏の強力な後ろ盾となった。桐壺治世においては、帝の深い信任を背景に、同族である右大臣勢力をも圧していた。その左大臣の語られざる政治人生として、若き桐壺帝を擁し旧勢力との権力闘争を制した功績が大であったという前史も想像されているが、いずれにせよ、左大臣が自家の勢力拡張に大きな手腕を発揮したことは認められるところである。

このような辣腕の政治家左大臣を父にもつ嫡子・内大臣には、「宮腹の中將」(帚木・五四頁)と呼ばれるだけの強い自負があった。それゆえに若き日の内大臣は、桐壺帝に最も寵愛された皇子である光源氏に對しても、「何ばかり劣るべき際とおぼえたまはぬ」(紅葉賀・三四七頁)と物怖じすることなく睦び寄り、何事においても光源氏への対抗心をむき出しにして挑んだ。しかし、冷泉後宮における覇権争いで源氏方に敗れるなど、内大臣の対抗心は徐々に光源氏の持つ圧倒的な力により潰されていき、光源氏が准太上天皇になるに際し「我も人にはすぐれたまへる身ながら、なほこの際はこよなかりける」(藤裏葉・四六一頁)と、若き日の自負を失い、光源氏への敗北を認めざるを得なかった。『源氏物語』において、内大臣が決して光源氏には勝つことのできない敗者として位置づけられていることについては、すでに様々な指摘がある⁷⁾。もちろん、内大臣が優れた実務政治家として世人の尊敬を集

め、多くの子女を持って家門を繁栄に導いた(少女・三二―三三頁)ことは言うまでもない。その一方で彼は、常人よりも優れているという自負と敵わない光源氏へのコンプレックスとを同時に抱えつつ、偉大なる父の跡を継ぎ、権門の柱石として光源氏と対峙しなければならぬプレッシャーからは逃れられなかったのだ。

とりわけ、左大臣亡き後、常に光源氏勢力に圧される一家の情勢に、大宮の口からは「故左大臣が…稿者注)おはせましかば、かくもてひがむることもなからまし」(少女・三六頁)などの恨み節が度々漏れることは注目に値する。たしかに、英明な左大臣がいましばし存命であったならば、光源氏ではなく内大臣が冷泉後宮での覇権争いに勝利し、政権を獲得できたかもしれない⁸⁾。それは言い換えるならば、亡き父を凌駕できない内大臣の、政治戦略の詰めの甘さを評した真実でもあるのだった。

こうした祖父と父を見て長じた柏木は、「高き心ざし」を抱き、長く独身を貫いて「皇女たちならずは得じ」(若菜上・三七頁)と朱雀院鍾愛の女三の宮を望んだ。柏木は、祖父左大臣が桐壺帝の妹の大宮(彼女も(女三の宮)である)の降嫁を得て、右大臣勢力を圧したように、現東宮の妹である女三の宮との結婚によって、東宮即位後を見据え、光源氏家を圧倒する勢力の獲得を目論んだ。つまり柏木は、父内大臣ではなく祖父左大臣のひそみに倣おうとしたのである⁹⁾。柏木が女三の宮を望んでいることは、内大臣自身も「いかばかりわがためにも面目ありてうれしからむ」(若菜上・三七頁)といい、先頭に立って女宮降嫁の実現に向けて奔走する。

このように、内大臣は自分の代における失速挽回を柏木に託し、将

来に期待をかけていたことが分かる。しかし、自分の後を継ぐ我が子が、父である自分ではなく祖父左大臣を範とした政治人生を目指そうとし、これを「面目ありてうれしからむ」と思う、その胸中の奥底に去来するものは果たして何であったのか。偉大なる父と、その父と同じ生き方を選んだ子と。その狭間にあった内大臣が愛息の死を目前にしてどう立ち回ったのか。内大臣の気づかざる欲望に迫りながら、改めて当該場面を読み解きたい。

五、父への対抗意識が〈子殺し〉へと向かうとき

葵の上と柏木はともに左大臣家嫡出の子女であり、家の繁栄に寄与することを期待されながらも、若くして急逝した。葵の上は、光源氏との関係に懊悩を深めた六条御息所の生霊によってとり殺され、柏木は光源氏への罪の意識に苛まれて自滅していったというのが真相だが、そうした真の事情を知るのはただひとり光源氏のみであり、世人はもとより、当の左大臣家すらその真実を知るよしもなかった。

では、彼ら（とりわけ内大臣）は、葵の上と柏木が早世しなければならなかった理由をどう理解しているのか。その手がかりになるのは、葵の上が夥しい数の物の怪によって苦しめられていたという次の記述である。

物の怪、生霊などいふもの多く出で来てさまざまの名のりする中に、人にさらに移らず、ただみづからの御身につと添ひたるさまにて、ことにおどろおどろしうわづらはしきこゆることもなければ、また片時離るるをりもなきもの一つあり。（中略）物の怪とて

『源氏物語』における〈子を亡くす父〉の系譜（外山敦子）

も、わざと深き御敵と聞こゆるもなし。過ぎにける御乳母だつ人、もしは親の御方につけつつ伝はりたるものの、弱目に出て来たるなど、むねむねしからずぞ乱れ現はるる。（葵・三三頁）

葵の上に憑いていた物の怪は、亡くなった乳母のような者や一族に代々崇っているものなど、夥しい数にのぼったという。なかでも、左大臣家に代々崇り伝わる怨霊の存在が語られるところには注意すべきだろう。そもそも物の怪は、一個人に取り憑くというよりも一族一門に代々に渡って崇るといふ方が一般的である。つまり、政治抗争に敗北した者が怨霊となって、勝った者の系譜に崇っていくという因果律が社会的に共有されていた。¹⁰ 左大臣邸では、葵の上に憑いている物の怪の正体を「この（＝六条御息所の）御生霊、故父大臣の御霊」（葵・三五頁）と噂している。ここから浅尾広良は、「歴史上記録された物の怪に徴して、父娘二代で崇る形態および物の怪が具体的な人稱を帯びてくるのは、政治の対立や皇統譜との関わりの中で、敗者が勝者の系譜上に崇る場合である」と述べ、六条御息所家と左大臣家とが政治的な抗争関係にあった可能性を指摘している。¹¹ 左大臣が旧勢力を圧したという政治的前史の可能性については前節でも触れたが、そのことも踏まえると、ここで葵の上に取り憑いた夥しい数の怨霊は、左大臣家（あるいは父である左大臣自身）が圧倒的な政治的勝者であったことを、何よりも証し立てているといえよう。左大臣家の論理に照らして言い換えるなら、葵の上は父左大臣の政治権力の犠牲になったということである。

このように、「権門に属する者の弱り目に乗じて敗者の怨霊が崇る」という因果律が社会的に共有され、葵の上の死もそのように諒解され

ているならば、柏木が原因不明の病に倒れた際、内大臣が葵の上の命を奪ったものと同じ怨霊の仕業を疑うのは、至極当然であったといえるだろう。

しかし、実際に柏木に取り憑いた（と内大臣に報告された）物の怪は、「女の霊」（柏木・二九三頁）だった。内大臣はこれに「さることもや」（柏木・二九三頁）と半信半疑である。怨霊の正体が政治的敗者のそれではなく、「愛執の念からその男に取り憑く」という「女の霊」であったことが彼には腑に落ちない。つまり、このときの内大臣にとって、柏木の命を奪おうとしている物の怪の正体は、葵の上と同じ「親の御方につけつつ伝はりたる」敗者の怨霊でなければならなかったのではないか。あるいは、そう信じたかったのではないか。葵の上を襲ったあまたの怨霊が父左大臣の勝者たる証として機能したように、今度は柏木に憑いている夥しい数の物の怪の存在が、父に劣らぬ権勢家であった（と信じたい）我が政治人生を証し立ててくれるはずだったからである。

その後の内大臣が、いるはずのない物の怪の調伏に執拗にこだわり続けたのは、柏木を救いたいという一念ゆえであったことは言うまでもない。だが、その執念の奥底に、偉大なる父に対する意図せざる対抗意識が渦巻いていたのではないか。つまり、自分も父に劣らぬ政治家家であったことの証を、彼は柏木に取り憑く物の怪に求めていったのだ。その行為は結果として、我が面目を施すため（自分の代わりに）父左大臣のようになってほしいと期待をかけたはずの愛息柏木の命を縮めてしまうことになる。しかしそれは、超えられぬ父へのコンプレックスが、（自分ではなく）父左大臣を範とした我が子に対する負の感情

へと形を変え、言うなればその無意識の葛藤こそが、柏木を追いつめるような行為へと彼を駆り立てていったのかもしれない。

六、結び—〈子を亡くす父〉への欲望—

本稿では、葵の上と柏木の死をめぐる類似的状况（あるいは差異）を挙げ、左大臣家が二代にわたって家門の支柱となるべき若者を亡くしたという事実が、彼らの死の真相を知らない左大臣家、とりわけ内大臣にとっていかなる意味をもつのかを考察した。

原因を突き止められぬまま、なす術もなく愛する子の命が失われていく危機的な状況下で、内大臣は父と同じ逆縁の宿縁を避けるべく懸命に抗ったものの、その抵抗が皮肉にも柏木を追いつめ、結果むなしく彼も〈子を亡くす父〉の宿縁に立ち至った。これが内大臣の意識の表層レベルだとするならば、彼の意識せざる深層レベルからは、もう一つ別の側面が浮かび上がるのではないか。「父と同じでありたかった」という封じられた欲望と「決してそうはなり得ない」という彼のコンプレックスとが、（自分ではなく）父と同じ生き方を選んだ我が子を殺めた。こうして内大臣は、父と同じ〈子を亡くす父〉の宿縁を自らたぐり寄せていく。それは彼の無意識の欲望でもあったのだ。

「父のようになりたくない」という抵抗と、「父のようでありたい」という秘めた欲望は、内大臣にとって矛盾するものではなく、表裏一体を為していたと見るべきであろう。それは同時に父子をめぐる関係の普遍的なありようにも通じる。そのことを、物語は内大臣という人物を通して語っていたともいえるのではないだろうか。

注

(1) 光源氏の義兄にあたる「内大臣」の呼称は、彼の代表的な官職から、前半生を「頭中将」、後半生を「内大臣」とされることが多い。本稿では、主に「葵」「柏木」両巻を考察の対象とするが、作中世界におけるその時々々の官職にかかわらず、便宜上「内大臣」で統一する。光源氏の舅にあたる「左大臣」の呼称もまた同様に「左大臣」で統一する。また、左大臣並びに内大臣を長とする〈家〉のことを、便宜上「左大臣家」と称する。

(2) 『源氏物語』本文の引用は、阿部秋生ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語 一〜六』（小学館、一九九四年〜一九九八年）に拠る。なお、各引用末尾に巻名と頁数を記し、私に傍線を付した。

(3) 阿部秋生ほか校注『新編日本古典文学全集 源氏物語 二』（小学館、一九九五年）三二頁頭注。

(4) 橘健二ほか校注『新編日本古典文学全集 大鏡』（小学館、一九九六年）七三頁。

(5) 藤河家利昭「保忠と柏木の死」『源氏物語の源泉受容の方法』（勉誠社、一九九五年）。

(6) 村井利彦「輔翼の思想―頭中将と光源氏、柏木と夕霧の友情―」室伏信助監修・上原作和編『人物で読む源氏物語 内大臣・柏木・夕霧』（勉誠出版、二〇〇六年）など。

(7) 森一郎は、内大臣の光源氏に対する対抗意識とコンプレックスを見て取る（「頭中将論」『源氏物語作中人物論集』、勉誠社、一九九三年）。鈴木裕子は、源典侍をめぐる関係から、決して光源氏には勝てないという物語世界での規範を見いだしている（「源典侍攷」『駒

『源氏物語』における〈子を亡くす父〉の系譜（外山敦子）

澤短期大学研究紀要』二三号、一九九五年）。原岡文子は、雲居の雁の常夏巻の昼寝の場面で、光源氏と内大臣をめぐる政治力学の構造を浮上させている（「雲居雁の身体をめぐる」『源氏研究』八号、翰林書房、二〇〇三年）。縄野邦雄は、光源氏と内大臣の対立関係は絵合の敗退でほぼ消えて、藤裏葉巻までは虚構の対立関係が引き延ばされ、若菜巻では空洞化した残骸のような構図が示されているにすぎないと説明する（「若菜巻の太政大臣家について」『源氏物語と平安文学 四集』、早稲田大学出版部、一九九五年）。

(8) 吉海直人「左大臣の暗躍」『源氏物語の新考察―人物と表現の虚実―』（おうふう、二〇〇三年）。

(9) 日向一雅「柏木物語の方法―光源氏の陰画の物語あるいは宿世の物語の構造」『源氏物語の準拠と語型』（至文堂、一九九九年）。

(10) 『采花物語』では、藤原師輔との政治抗争に敗北した藤原元方が、怨霊となり村上天皇や中宮安子（師輔女）ほか一族に次々と祟ったとされる。政治的敗者が勝者の一族に代々にわたって崇っていくとされる一例である。

(11) 浅尾広良「源氏物語における物の怪―六条御息所と先帝―」『源氏物語の準拠と系譜』（翰林書房、二〇〇四年）。

(12) 藤本勝義『源氏物語の〈物の怪〉―文学と記録の狭間―』（笠間書院、一九九四年）。